# ◎茶室「光華」について

## Tea Ceremony Room KOKA

紅葉の季節の茶室外観。池には鯉が放されています

庭園美術館の庭に位置する茶室「光華(こうか)」は、宮邸竣工から5年後の1938(昭和13)年、朝香宮鳩彦(やすひこ)殿下によって建てられたものです。屋根瓦には菊のご紋章が付いていますが、都内に菊のご紋章の付いた茶室は数少ないといわれています。

広間からの眺め

「光華」という茶室名は殿下による命名で、直筆の扁額(へんがく)が立礼(りゅうれい)の席の上部に現在でも掲げてあります。茶室の前の庭は、かつて大名や貴族が好んだ書院式茶庭となっており、宮邸の回遊式日本庭園の一部として、とくに広間からの眺めは見事なものです。蹲踞(つくばい)、灯籠(とうろう)、飛石は自由な配置となっており、池と庭園には当時全国から集められた名石が使用されました*1。造園は宮内省内匠寮(たくみりょう)が行っています。

茶室の設計は、茶道具の鑑識や料理にも通じていた茶人、武者小路千家(むしゃのこうじせんけ)*2の中川砂村(なかがわしゃそん)(1880-1957)が、施工は数寄屋大工の棟梁で名工とうたわれた平田雅哉*3(1900-80)が担当しました。平田は戦前に大阪で数多くの茶室を手掛け、戦後には料亭、旅館、住宅などの数奇屋建築*4を建てていますが、なかでも「吉兆」「なだ万」「大観荘」「万亭」「つるや」などは有名でしょう。数寄屋建築にかけては日本屈指といわれた平田棟梁と鳩彦殿下との出会いには、次のようなエピソードが残されています*5。

大工として働いてきた平田は、それまで背広を着る機会などなく、殿下とお会いするために、生まれて初めてネクタイを締めて上京しました。うっかり解(ほど)いては、後で難儀をすると思い、宿ではそのまま頭から抜いて掛けて置きました。しかし事情を知らない女中さんがきれいに解いてしまい、平田は出発間際に気付きましたが、結局ネクタイなしで宮邸に向かわざるを得ませんでした。当時はノーネクタイで宮様に会うなど許されない時代です。お付きの事務官たちは大慌てとなりましたが、殿下は意に介さず、平田とお会いになりました。そのお人柄に感じ入った平田は、殿下のご期待に添えるよう、茶室の施工に全力で取り組んだといいます。(仲山)

春には白梅も見事に咲き誇ります

*1.明治天皇より拝領された「くらま石」が蹲踞に用いられています。「くらま石」とは京都の鞍馬で取れる石のこと。鞍馬の石は名石といわれ、庭園によく用いられます。

*2.茶道三千家のひとつ。千宗旦の次子宗守が京都武者小路に分家したため、町名をとって呼ばれます。

*3.平田をモデルにした映画「大工太平記」(主演:森繁久彌)が1965年に製作されています。

*4.茶席、勝手、水屋などが一棟に備わった建物。または茶室風の建物のこと。

*5.平田雅哉、内田克己『新版 大工一代』、建築資料研究所、2001年